

えど友ホームページ
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会会報

目次	「データで見る」友の会の構成 1	えど友サークルだより/会議・会合日誌 7
	友の会セミナー『江戸前にぎり鮎よもやま話』 2	えど友プラザ【特集】江戸小説とその作家 8
	友の会セミナー『江戸川柳が描く吉原図絵』 3	『江戸小説の舞台』/『子母澤寛・生きている江戸人を感じる』/『懐かしい時代へ』
	友の会セミナー『幕末の政治状況と体制委任論の変容』 4	えど友プラザ『残したい震災復興小公園』 9
	見学会『川面から見る江戸東京』 5	「江戸博から大川を渡って」⑥【史跡めぐりの便利バス】 10
	友の会特別観覧会『文豪・夏目漱石—そのこととまなざし—』 6	催事案内/会員優待 11~12
	江戸博クリップ『サルの惑星』 6	



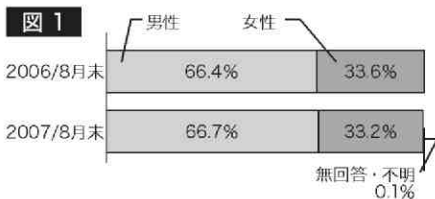
友の会の構成 順調に伸びる会員数(1,391人)

入会時や更新時に会員のみなさんから聞きしている性別・年齢・住所・入会日などのデータを年1回8月末で集計しましたので、その結果についてお知らせします。

まず、会員数は順調に増え、昨年の1,106人から285人増加して1,391人になりました。

◆男女比は変わらず2対1

本年8月末現在では、「男性」928人(66.7%)、「女性」462人(33.2%)ですから、男女の比率は2対1ということになり、この割合は昨年(「男性」66.4%、「女性」33.6%)とほとんど変わりません。



50代・60代が微増

年代別では「60代」が最も多く35.2%、次いで「70代」24.7%、「50代」18.6%の順で、この傾向も昨年と変わりません。

ただし、「50代」、「60代」の割合が昨年に比べ若干ながらふえている(51.3%→53.8%)のが注目されます。

なお、「平均年齢」は63.8歳でした。

図2

	2006 / 8月末		2007 / 8月末	
	人数	%	人数	%
30歳未満	7	0.6	13	0.9
30代	45	4.1	48	3.3
40代	68	6.1	82	5.9
50代	197	17.8	259	18.6
60代	371	33.5	490	35.2
70代	285	25.8	343	24.7
80歳以上	77	7.0	86	6.1
不明	56	5.1	72	5.2
計	1,106	100.0	1,391	100.0
平均年齢	63.9歳	—	63.8歳	—

◆埼玉・千葉・神奈川3県の居住者が増える

住居地別では、「東京都」在住者が全体の65.3%をかぞえ、ほぼ3人に2人が都民となっています。

昨年と比較すると、「埼玉」「千葉」「神奈川」3県の居住者が昨年の27.3%から30.4%へと増えています。なかでも「千葉県」居住者は12.7%から15.0%へと増加しています。なお、1都3県以外の居住者も60人を数えています。

図3

	2006 / 8月末		2007 / 8月末	
	人数	%	人数	%
23区内	664	60.0	795	57.2
都下	86	7.8	113	8.1
(東京都計)	750	67.8	908	65.3
埼玉県	93	8.4	124	8.9
千葉県	141	12.7	208	15.0
神奈川県	68	6.1	91	6.5
(3県計)	302	27.3	423	30.4
その他	54	4.9	60	4.3
計	1,106	100.0	1,391	100.0

◆2006年以降の加入者が全体の45%弱

ここ1、2年の会員増を反映して2006年入会者が23.5%、2007年入会者が21.1%を数えています。次いで多いのが友の会誕生の年に加入された2001年加入者で2割弱を占めています。

図4

	2006 / 8月末		2007 / 8月末	
	人数	%	人数	%
2001年入会	291	26.3	261	18.8
2002年入会	95	8.6	86	6.2
2003年入会	167	15.1	151	10.9
2004年入会	133	12.0	117	8.4
2005年入会	192	17.4	155	11.1
2006年入会	228	20.6	327	23.5
2007年入会	—	—	294	21.1
計	1,106	100.0	1,391	100.0

【報告】 広報部会・菅沼和男
集計：事務局・藤井啓子

「江戸前にぎり鮓よもやま話」

講師 吉野正二郎さん (日本橋吉野鮓本店店主)



鮓の歴史

鮓には2千年もの歴史があります。奈良時代(710～793)すでに食べられていた鮓が、今でも食べられているというところに日本人と鮓とのぎざの深さが感じられます。

奈良時代の鮓は、魚・米・粟をでんぷん質で自然発酵させ、乳酸の酸味で魚の腐敗を止め、米と粟を捨てて魚だけを食べていたのです。その内に米も食べるようになったというところが、今、米を主食にしている日本人というところにつながってくるのではないのでしょうか。鮓そのものは中国から伝わってきたのですが、現在、中国では食べられていません。

「すし」という字には、魚偏に「旨」と書く「鮓」や、魚偏に「乍」と書く「鮓」(関西で多用)があります。これらは漢の国の字で、「寿司」は、日本で作られた当用漢字による当て字です。

鮓は今のにぎり鮓ではなく、関西の箱鮓や熟れ鮓のことでした。琵琶湖でとれる鮓を使った鮓鮓や鮓鮓など川魚を使った鮓です。

江戸前の由来

「江戸前」という言葉は、鰻屋から始まりました。徳川家康が入府して江戸城の前を埋め立てるにあたって神田の山を取りくずさせます。その時に使った人足たちに、神田川などの東京湾にそそぐ川にいる鰻を食べさせました。まだにぎり鮓はないところで、鰻は江戸で最高の食べ物でした。その鰻に「江戸前」とつけたのです。その内に鰻屋は「江戸前」という言葉を使わなくても価値のある食べ物になりました。鮓屋はそれをいただいたわけです。

贅沢禁止令と鮓屋

宝暦3年(1753)、芝居「義経千本桜」

の3段目に出てくるつるべ鮓は、江戸横山町で釣瓶形の桶に鮓を入れて客に出しており、このとき桶に入っていたのは鮓鮓でした。後に関西方面からどんどん鮓屋が進出してきますが、にぎり鮓はまだありません。

享和～文化・文政の頃(1800年代)、両国の横綱町に與兵衛鮓、本所に松之鮓が店を出します。両国・深川辺りは幕府の要人たちの屋敷が多く、そこへの付届けに鮓が使われました。鮓の包みに小判を挟んだりしたのです。天保の改革(1841～1843)では、この有名な與兵衛鮓と松之鮓は贅沢禁止令でお縄になっています。

鮓は料理屋のようなところに上がって食べていました。明暦の大火(1657年)までは、外で食べ物を売ったという記録はありません。大火後、浅草あたりにできた奈良茶という店が初めて外で食べさせたということです。

にぎり鮓の登場

にぎり鮓は文政元年(1818)ころに華屋與兵衛という人が完成させました。当初のにぎり鮓は、米1合(180ml)でにぎりが5つ、海苔巻が2切れで賄っていました。これだと1つがかなり大きいため、女性・お年寄り・子供たちには食べにくかったのです。ある時、現在の日本橋三越の前にある鮓屋が、にぎりを2つに切って客に出しました。非常に好評で、他の鮓屋はやっかみましたが、結局これがヒントになり、2つずつ出すようになったのです。

嘉永6年(1853)に黒船が来て、慶応4年(1868)には明治維新です。にぎり鮓といえば「江戸前」ということになり、江戸時代を連想しますが、にぎり鮓は、かなり明治に近くなってからできたものなのです。

鮓屋のカウンター

今は見かけなくなりましたが、江戸の町は角々に屋台が出ていました。そこへ風呂屋帰りの小僧さんなどが立ち寄って、にぎり鮓を手でつまんで食べていたのです。

現在もどこの鮓屋にもカウンターがありますが、これは屋台を店の中へ引き込んだものです。また屋台では鮓屋は必ず南を背にして立ち、明かりを入れました。ほこりがお客様の目に入らないようにするためです。多くの店でカウンターが南を背にして立つようになっているのは、この名残です。カウンターの中では、あまり話はしないようにしています。お客様へお出しする鮓に息がかかったりしては失礼になるからです。

世界の鮓へ

今や鮓は鮓バーとして世界に行き渡りました。しかし、海外でひどい鮓を出されてがっかりしたことがあります。こんな鮓を食べた日本が経済大国になったと思われているのでしょうか。もし、外国旅行で鮓を食べる機会がありましたら感想をはっきりと言ってきてほしいと思います。

私は吉野鮓の四代目です。初代は千葉木更津の出身で10歳から料理屋に奉公し、その後、鮓屋を始めました。私は四代目で息子が五代目です。奈良時代からあるという鮓で、今も商いをしていることを誇りにしております。

私の父(三代目)が詠んだ歌です。

「江戸で生まれて東京で育ち

今じゃ日本をにぎりずし」

しかし、今では「世界をにぎりずし」と言えるようになりました。

【記録】文：広報部会・岡橋園子
写真：同・佐藤幸彦

吉原ができるまで

秀吉の命令で天正18年(1590)に江戸入りした徳川家康は、当時、ほとんど湿地帯だった下町に運河を掘り、排水設備を整え、掘り出した土を盛りあげて敷地を作っていた、いわゆる江戸時代の基礎を築いたわけですが、元和3年(1617)には遊廓をつくる許可も与えています。家康が征夷大將軍になったのは慶長8年(1603)ですからその14年後です。これが、江戸幕府公許として幕末まで250年も続いた遊廓の始まりでした。場所は日本橋草屋町、広さは2町(約218m)四方ほど、当初は葦が沢山生えていたもので、この地はヨシ原と呼ばれたのです。

◆よしの根は絶えて後には女郎花

ところが、吉原のある日本橋近辺がだんだんにぎやかになり、繁華街になりましたので、江戸幕府は遊廓全体を浅草観音の裏、日本堤の近くに移転するように命じました。明暦2年(1656)のことです。移転の条件としては、今から考えると良かった、と思います。土地は5割増し、移転料として1万500両(現在の価格では10億円前後)、そして夜の営業を許す、ということは、それまでは昼間だけの営業だったわけですね。ところがここで、大きな事件が起きました。翌明暦3年(1657)1月の明暦の大火(いわゆる振袖火事)です。この大火で、江戸城の本丸をはじめ江戸のほとんどが燃えてしまったのです。俗に死者数10万8千人といわれていますから、ものすごい大火だったということは明らかです。もちろん、この火事で日本橋の吉原も全焼してしまいました。

こうして、突然営業ができなくなりましたが、連中はしぶといですね、移転先として指定されていた浅草寺近くの田んぼの中、現在の山谷あたりで仮宅営業を行い、一時的にしのいだようです。本格的な再開は大火からわずか7ヵ月後の明暦3年8月、周りが全部田んぼの中に不夜城新吉原が誕生しま

講師 吉澤 靖さん
(元昭和学院短期大学国文科教授)

「江戸川柳が描く 吉原図絵」



第57回 江戸東京博物館友の会セミナー
(2007/8/25)

—遊興の町に生きる人と遊客—

した。

◆裏門を左り左りと行けばよし

吉原のあれこれ

新吉原へ行く方法は主に二つありました。柳橋などの船宿から猪牙舟で山谷堀まで行き、後は吉原への取付け道路のような日本堤に行く、もう一つはその日本堤を駕籠を飛ばして来て吉原大門まで下りる。行く方法は違っても目指すところは同じというわけです。

◆猪牙と駕われても末は仲の町

土手八丁(日本堤)から大門までの50間(約90m)の下り坂が衣紋坂です。女郎の揚げ代はピンからキリまでですが、仮に上妓の上げ代3分(7~8万円)としても、料理や飲み物代等々がありますので、今のお金で10万円以上かかります。ですから、度々行くと…。

◆衣紋坂度々下りて左り前

新吉原の広さは奥行き135間(約243m)、横幅180間(約324m)あり、江戸町ほかいくつもの町が並び、大門を入った仲の町通りの両側には御茶屋が軒を連ねていました。登楼する客よりもヒヤカシが多かったようです。江戸町というのは大門に入ってすぐのところにある町ですが、他の町をぐるりと回って最初に目を付けていた女郎は？ アレレ？ いない！

◆江戸町へ戻れば初手の顔はなし

遊客はいろいろでした。なぜか川柳にでてくる息子は道楽息子ばかり。

◆むすこの耳は馬つらはかわづなり

これは、『馬の耳に念仏』と『蛙の面に水』の諺をもじったものです。遊蕩亭主の朝帰り、夫婦喧嘩、その後は…。

◆朝帰り旦那がまけてしずか也

当時、1日千両の金が動くところと言えば3ヵ所、日本橋魚河岸、江戸3座(中村座、市村座、森田座)、それにここ吉原です。その吉原を紀伊国屋文左衛門はある日買い占めました。

◆吉原を丸で買ったのは文左衛門

◆大騒ぎ五町に客はひとりなり

そんなお客とはまるで反対の可哀そうなお客もいました。子は夜の12時、寅は午前4時のこと。

◆番頭は子に行き賓にかえるなり

初めて遊女として出る際は、出るのを渋ってしまいます。そこで、誰かにつき出されるようにして出てくるわけで、つき出し、です。はれまぶち、というのは泣いて目がはれている状態を言います。

◆つき出しの一日二日はれまぶち

新造というのは、姉女郎の後見つきで新しくつとめに出た若い遊女で、よく笑うし、眠たい盛り。

◆新造は寝るも笑うも二人前

◆新造はふる気ではなし寝る気也

これら遊女を取り仕切っていたのが遣手婆で、遊女や禿への指導も仕置きも厳しく、欲が深くて嫌われ者でした。

◆二階から遣手おろしが見世へ吹き

20年ほど前ですが、遊客が名残りを惜しんで振り返って見たという柳を探しに行きました。大門があったあたりです。ありました！ ガソリンスタンドの脇に、細く、ひねこびた柳が。このへんを沢山の遊客が歩いたのだな、と様変わりした繁華街の片隅に立っている何代目かの柳を見て感無量でした。

◆もてたやつばかり見返る柳なり

【記録】文：広報部会・福島信一
写真：同・佐藤幸彦

「幕末の政治状況と 大政委任論の変容」

井伊直弼の大政委任論を手がかりに

講師 大庭 邦彦さん (成徳大学教授)



安政5年(1858)6月、大老井伊直弼はアメリカとの修好通商条約を天皇の許可を得られないまま調印を断行しました。条約勅許問題は、朝廷と幕府との間に激しい政治対立をもたらしましたが、それは、「鎖国」から「開国」への国是の転換に深くかかわっていたからに他なりません。井伊は、そのような勅許問題の本質を見据えつつ、大政委任論の立場から無勅許調印を正当化したのでした。

〈天皇→將軍〉的大政委任論とは

この大政委任という考え方が、幕末の政治状況にどのような影響を与えていったかについて、井伊の腹心であった彦根藩公用方宇津木六之丞が中心となって編纂された『公用方秘録』という活動記録に登場する一節を手がかりに考えてみましょう。

『公用方秘録』の安政5年6月19日の項には、「素より国家之大政関東江御委任」と記され、天皇から幕府=將軍に大政が委任されているという論理によって、無勅許調印の断行が正当化されています。このことは、すでにこの段階で、大老井伊直弼等の支配層の共通認識として、天皇が將軍に対して大政を委任するといった〈天皇→將軍〉的大政委任論(以下「大政委任論」と略す)が自明の前提となっていたことを示していると考えられます。

しかし、自らの才覚によって太平の世を実現した徳川家康は、大政委任によって「天下人」となったわけではありません。にもかかわらず、慶応3年(1867)10月、十五代將軍徳川慶喜が大政奉還を申し出たことは周知の通りです。だとすれば、260年余にわたって続いた江戸時代のどこかで、大政委任という考え方が、少なくとも支配層の一般的な共通認識とならなければ、大政奉還といった政治的決断もありえなかったこととなります。

大政委任論の成立

問題は、この大政委任論の成立時期はいつかということ。従来の研究

では、藤田覚氏がその成立を天明・寛政期である1780年代に置かれているのに対して、大口勇次郎氏は1858年の日米修好通商条約調印後に置かれています。これに対して、わたしは、1780年代以降こうした大政委任論が理念的・思想的レベルで登場してくる事実は認めつつも、藤田氏の言われるように天明・寛政期に支配層全体の共通認識となったかという点までは断言できないように思っています。

一方、大口氏は、大政委任論成立の根拠に、条約調印のあとの一橋派諸侯の不時登城による調印糾弾が、勅許を得なかった点に求められています。しかし、『公用方秘録』の文面によれば、無勅許調印そのものが、大政委任論によって正当化されているのであり、だとすれば調印以前に支配層の間で、大政委任論が共通の認識として共有されている必要があるのではないのでしょうか。

おそらくは、天明・寛政期以降、そうした考えが主張され始め、1830年代以降外圧が急激に強まり、「鎖国」

の維持が現実的に困難となりつつあるなかで、支配層の間に短期間に浸透し、共通の認識として普遍化しつつあったのではないかと考えています。つまり、表面化こそしていなかったものの、この時期すでに支配層の共通認識となっていた大政委任論が、勅許獲得問題および一橋派大名の調印糾弾を機に顕在化した、ということがこの段階での実態だったと思われます。

大政委任論の変容

こうした井伊の段階の大政委任論は、幕府への委任が自明の前提とされ、幕府の専制的意志決定の正当化の論理として使用されていたのに対して、井伊が暗殺された万延元年(1860)の桜田門外の変、井伊の横死後幕政を主導した老中安藤信正が文久2年(1862)に暗殺未遂に遭遇する坂下門外の変という二つの事件を経ると、状況は一変していきます。

政治の主導権は、この文久2年を転換点として、それまでの幕府主導から朝廷主導の形へと変わり、翌年3月、家茂が將軍として230年ぶりに上洛することとなります。その際に、最大の問題となったのは、天皇から將軍に大政が委任されていることを、いま一度確認してもらおうということでした。直接の交渉にあたったのは、將軍後見職として家茂より先に上洛していた一橋慶喜でしたが、彼の努力にもかかわらず最終的には、完全な大政委任は確約されませんでした。この段階では、既に幕府への大政委任が自明のものではない状況となっていたのです。

幕府はこの後も、繰り返し大政委任の保障を求め続けて行くこととなります。こうして幕末の大政委任論は天皇・朝廷を委任主体とする認識を共有しつつ、それを誰に委任するかをめぐって展開していきます。その延長線上に慶喜の大政奉還が断行されるのです。

【注】本稿はセミナー実施後、大庭邦彦講師にまとめていただいたものです。
写真：広報部会・松原良

川面から見る江戸東京—船による東京の川めぐり

一味も二味も違う船から見る東京

台風一過の言葉通り、真夏に戻ったかのような日差しの中、友の会主催の「川面から見る江戸東京」が行われました。希望者が200余名と多数だったため、午前中だけ運行の予定を午後にも実施し、午前中5そう、午後2そうの合計7そうによる運行となりました。

集合、出発は秋葉原駅近く昭和通りに架かる和泉橋。神田川から隅田川、小名木川に入って扇橋こう門で折り返し、隅田川から日本橋川を通って後樂園の所から神田川に戻り、和泉橋に戻るという約2時間強のコース。友の会スタッフに加え、「神田川船の会」の方々がとても詳しい解説をして下さり、子供に戻ったようにあちこちをきよるきよるしながらの船旅でした。

神田川は、以前汚い川の代名詞のように扱われ、また大雨による水害も多く発生する川でしたが、今は魚も戻り、船の近くにはユリカモメも舞い降りる川に戻っています。この日は台風の影響で水量が増え、水が大分汚れていましたが、それでもかつてのような状況ではなかったように思われます。これには「神田川船の会」の方々の神田川浄化、環境改善への取り組みも大きく寄与しているものと思います。

船の上からみる東京は、普段見慣れている風景とは一味も二味も違うものでした。隅田川は水上バスがあり、川幅も広いのでそれ程違いを感じませんが、それでも川沿いの高層ビルは普段以上に高く、通り慣れている橋も下から見上げるとよりいっそう大きな物に感じられました。万年橋は永代橋に対抗して名付けられたこと、その永代橋は昭和15年(1940)まで隅田川の第一橋梁でしたが、それ以後勝鬨橋にその地位を譲ったこと、新大橋は五代将

軍綱吉が母の進言により架けたこと、清洲橋はドイツのケルンを流れるライン川のつり橋をモデルに架けられたことなど、気持ちの良い川風を受けながら説明を聞きました。

「扇橋こう門」で運河の体験

小名木川に入る所に芭蕉史跡庭園があります。夕方5時からライトアップされるといふ芭蕉像は小さな船旅を見送ってくれているよう。小名木川をゆっくり進むと今日のメイン「扇橋こう門」です。まるでパナマ運河のように水位調節をして、船の運航を助けます。地下水の汲み上げによる地盤沈下で、水位差は約1 m 60 cm、前後の扉を閉め、約20分かけて船を上げ下げします。扉から滴り落ちる水にぬれないように雨具の用意、子供に返った一瞬でした。



▲「扇橋こう門」前扉から入る

隅田川に戻り、佃島の高層マンション群を眺めながら今度は日本橋川に入ると高速道路の屋根の下に入ります。かんかん照りの中を来たので、ちょっとほっとします。

ここは江戸時代河岸が多くあった川で、あちこちにその名残が見られます。兜町(かぶとまち)一带を抜けると日本橋。陸上から見る日本橋は高速道路に覆われてかつての姿がかすれてしまっていますが、水上から見上げたそれはやはりかつての要所。江戸文化発祥の地にふさわしいものでした。橋柱の「日本橋」の文字は最後の将軍慶喜の筆によるものだそうです。

JRの鉄橋の橋桁中央に旧国鉄の紋章(動輪のレリーフ)、これは船の上からだからこそ見られるもので、この橋は関東大震災にも耐えた頑丈な造り。まっすぐな組板橋、住民からの公募によって名付けられたあいあい橋を抜け、東京ドームの所で神田川に戻ります。

ここには千代田区清掃事務所三崎町中継所があります。千代田区・文京区から出された燃えないゴミはここで船に積まれ、東京湾の中央防波堤外処分場へ運ばれます。1日に56トン、年間約1万7千トンにも及ぶそうです。江戸時代に発達した水運、これだけさまざまなテクノロジーが発展した今日でもなお、江戸時代からの手段が息づいていることに、改めてあの時代の技術の高さに感心させられました。

下から見上げる聖橋

お茶の水橋を下から見上げた所で、神田川をきれいにするお手伝い、EM菌(水質を改善する微生物)をまきます。今すぐにと言うわけにはいきませんが、近い将来、昔のようなきれいな神田川に戻ってくれますように…。

御茶ノ水駅の下を流れる神田川、いつもは見下ろす光景を今日は見上げています。聖橋(ひじりばし)の美しい姿は下から見ても同じ。万世橋を抜けるといよいよゴール、柳森神社に船旅の無事を感謝しつつ船を降りました。本当に素晴らしい経験をさせていただきました。



▲下から見上げる聖橋も美しい

【報告】文・写真：会員・石谷貴久子

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2007/9/27)

『文豪・夏目漱石 —そのころとまなざし—』



漱石人形に迎えられて

江戸博では特別展「文豪・夏目漱石—そのころとまなざし—」を9月26日から11月18日まで開催しています。夏目漱石の膨大な書籍や資料などを集めたこの特別展は、これまで全国各地で開催された「漱石展」では見ることでできなかった資料の集積が見られるとのことでした。

9月27日5時から、友の会会員を対象にした友の会特別観覧会が開かれました。はじめに江戸博の橋本由起子学芸員による「見どころ解説」が江戸博1階会議室で、そのあと企画展示室

に移動して、展示品を見学しました。

この企画展示室に入ったところにちょっとした仕掛けがありました。それは骨格などを調査して作った漱石人形と漱石の声を聞いてもらうというものです。橋本学芸員によれば「人形を見てもらい、漱石の声を聞いてもらって、漱石のイメージを持って展示室に入ってもらい」ことが狙いだということです。人形は写真で見ると彼の姿そのものという印象を受けますが、声については骨格などから科学的に再生された声だとのことですが、皆さんのイメージはいかがだったでしょうか。

この特別展には「東北大学創立100周年記念」、「朝日新聞入社100周年記念」、「江戸博開館15周年記念」と3つのサブタイトルがついています。

漱石が残した蔵書や資料、身の品々を戦火で焼かれることを免れるため、それらを東京から移した先が東北大学です。なぜ東北大学かという当時の同大学図書館長が、漱石門下の小宮豊隆だったためです。以後「漱石文庫」として大切に保管されています。今回、漱石の膨大な書籍などが見られるのも、このときの書籍・資料の疎開のおかげといえるでしょう。



展示品を熱心に見る会員

夏目漱石は40歳で朝日新聞に入社しています。それがちょうど100年前のことです。以後、多くの名作を新聞に連載し、小説家としてさらなる活躍することになる転機でした。

展示品で驚かされるのはその蔵書の多さです。イギリス留学時代に購入した書籍は、隅々まで読むと同時に書き込みも英文で細かく記されています。

書籍は文学ばかりでなく、美術書なども多数見られます。また、漱石の作品の初版本も見ることができ、その装丁の美しさは抜群です。

このほか、漱石の手による書や絵画があり、その多彩さを見ることができます。「漱石の生涯を追うことは明治時代を追うことだと実感してほしい」（橋本学芸員）とのことでした。

【取材】文・写真：広報部会・大石憲一



江戸博クリップ

サルのは惑星

少々遅い夏休みをいただき、初秋の上高地に出掛けて来ました。芥川龍之介の『河童』にも登場した河童橋を過ぎ、梓川の上流に向かって2時間近く、穂高連峰の稜線を眺めながらのんびりと歩を進めて行くと、ふと対岸に気配を感じました。もうほとんど出会う人もいなかったのに、何だろうと思って見ると、梓川に横たわった倒木の上を走ったり、川の中を軽やかに飛びながら来るわ、来るわ、子ザルを含めた数十頭のサルが…。それもこちらに向かって。「上高地のサルは悪さをしま

せん。でも食べ物は絶対にあげないでください。目も合わせないでください」という地元の方の言葉を思い出しました。いえ、正確には、目を合わせてはいけない、という部分はすっかり忘れ、思わず見つめ合ってしまった。でもサルもその辺の実を食べながら、「こらで見かけないサルだねえ」とでも言いたげにこちらを見ているだけです。私がいてもお構いなしに思い思いに行き交っているだけです。

上高地は、マイカーの乗り入れやペット連れ、各施設でのゴミ焼却も禁

司書 式 淳子

止しています。屋外にゴミ箱は一つもなく、各自でゴミを持ち帰るわけですが、逆に落ち葉1枚持ち帰ってはいけない、自然への影響を最小限にするための配慮を徹底している地域です。ヒトが傲ることなく、自然をあるがままの状態を守り、伝えようとする姿勢は、本という博物館資料と向き合う図書室の仕事にも通じるものがあると思いました。

◆このコラムは江戸博の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。



◎活動概況

- ◆江戸・東京を巡る会：8月24日（金）京王線つつじヶ丘駅より六阿弥陀仏第5番・常楽院を訪ね、深大寺まで足をのびした。参加者は18名。なお、これで六阿弥陀仏を全部まわったので、次回から五色不動と江戸三十三観音めぐりをスタートする。
- ◆落語・講談を楽しむ会：8月7日（火）江戸博会議室で次回散策関連の落語「大山詣り」と「江戸時代の大山詣り道中解説」などのビデオを鑑賞。参加者6名。9月4日（火）神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社、大山寺に参拝し、落語「大山詣り」に思いをはせた。参加者7名。
- ◆藩史研究会：8月24日（金）「丹後田辺藩」について市川勝さんが研究発表。参加者24名。9月7日（金）「近江彦根藩」について子安洋子さんが研究発表。参加者16名。
- ◆古文書で『八丈実記』を読む会：8月9日（木）、8月24日（金）、9月13日（木）、9月28日（金）に例会を開催。参加者は各7名、7名、9名、7名。
- ◆江戸御府内八十八カ所をめぐる会：第3回として8月30日（木）と9月2日（日）に「第4番高福院」（品川区上大崎）など2カ所をめぐる。参加者は各21名、11名。また、第4回として9月27日（木）と9月30日（日）に「第73番東覚寺」（江東区亀戸）など4カ所をめぐる。参加者は各19名、8名。

◎スポット紹介

江戸御府内八十八カ所をめぐる会

本会は比較的新しく、平成19年6月に29名で発足し、現在は33名。御府内八十八カ所は宝暦年間（1760年頃）

にはじまったミニ遍路で、山手線の内側に約50カ所、遠い所では日野、秦野などに散在しています。御府内にはない寺は、震災や戦争、江戸時代の火事などで移転したものです。

松原良さんに話を聴きました。松原さんは自称「世話人」ですが、お寺さんからは「先達さん」とも呼ばれるそうです。行事は毎月最終の木曜日とその次の日曜日に同じコースを巡ります。なるべく木曜日に多勢参加してほしいそうです。松原さんは2回とも同行、まさに先達です。1回に1～9カ寺を3時間前後かけてまわります。

原則として参拝が主体ですから、名所・旧跡に立ち寄ることはあまりありません。とは言っても江戸っ子？の集まりですから、先日の第4回は、やじ馬に変わって話題の某相撲部屋で道草をするコースになりました。その他今までに三田台公園（貝塚）・おしろい地藏（第1回）、本法寺のはなし塚（第2回）、とげぬき地藏（第3回）、亀戸天神（第4回）等々に立ち寄っています。

参加者の大半はご朱印を集めています。八十八カ所めぐり専用の集印帳は1番札所（高輪の高野山東京別院）で購入します（3,000円）。行く先々で読経や納経をする人もいます。それぞれに一つの願い事を掛けて巡るのが良いそうです。会費は、通信費として月額200円、10ヵ月分前納です。各回、事前に案内と地図が配布されますが、「江戸御府内八十八カ所」の参考書を2点松原さんに挙げていただきました。

『古寺巡礼5 江戸御府内八十八カ所めぐり』
高橋俊輔著 JTB キャンプブックス 1,600円
『大江戸めぐり 御府内八十八ヶ所』
和田信子著 集英社 1,785円

【取材】文：広報部会・佐藤幸彦

◆役員会

8月8日（水）17時開催。映像による記録については、検討の結果現時点では実施しないこととした。「えど友」は会員数増加をふまえて1800部に増刷することにした。出席者10名。
9月12日（水）17時開催。8月末の会員の動向調査は年齢別・性別・住居別・入会年次別での報告があった。「江戸文化歴史検定」の申込者は延べ224名（3級31名、2級116名、1級77名）。
見学会の解散時間についてはおよそ

会議・会合日誌

2007/8～2007/9

の終了時間を知らせることにした。出席者12名。

◆事業部会

8月2日（木）17時開催。各セミナー参加人員の報告があった。古文書受講人員増加について対策（案）が出された。出席者14名。

9月6日（木）17時開催。9月の事業と担当者が決定した。バス旅行については締切後に詳細を報告することとした。出席者13名。

◆広報部会

8月17日（金）13時開催。「江戸小説と作家について」をテーマに原稿募集することにした。出席者11名。
9月21日（金）13時開催。新年号巻頭記事と新連載の企画は次回検討することにした。出席者10名。

◆総務部会

8月29日（水）13時開催。発送作業、在庫調査をした。他部会への応援依頼を検討した。出席者11名。
9月28日（金）13時開催。発送業務および在庫調査を行った。出席者8名。

【特集】江戸小説とその作家

江戸小説の舞台

杉浦武雄

「江戸小説+シリーズ物」といえば白眉は池波正太郎であろう。

『鬼平犯科帳』『剣客商売』『藤枝梅安』の小説は、シリーズものであるが、各々の作品自体は短編であるため、気軽に読むことができる。また、これらの小説を江戸切絵図を参考にしながら味わうと一層面白さが増す。

かつ橋商店街の北に台東区の施設として「池波正太郎文庫」がある。そこには、池波正太郎の作品・書斎の様子や『鬼平犯科帳』『剣客商売』『藤枝梅安』シリーズに登場した場所が作品毎に記された地図が展示されている。

一昔前に数年ほど、仕事の関係で月2回程度、私の勤務先の本郷三丁目から駒込富士までバスを利用した経験がある。そのころはまだ地下鉄の南北線が開通していなかったため、もっぱら都営バスが交通手段であり、始発の御茶ノ水から終着の王子までのバス路線はそれなりに利用客が多く、地域の足として定着していた。そのころ『鬼平犯科帳』に親しみ、度々登場する本郷通りに興味があった。何と云っても鬼平（長谷川平蔵）の従兄にあたる三沢仙右衛門の家が巢鴨にあったため、本郷通り沿いの場所が小説の舞台として数多く登場している。バスの路線は、本郷通りを北へ進んでいく。途中には「本郷もかねやすまでは江戸のうち」とうたわれた「かねやす」、将軍家より前田家にお姫様が嫁ぐことのお祝いに建築した加賀百万石・上屋敷（東大）の赤門、JR中央線の駅名の元となった吉祥寺、7月1日に祭礼を行う富士

講の駒込富士、更に進むと柳沢吉保の別邸である六義園、江戸時代は無名だったが今ではバラの美しい旧古河庭園、神田に住む町人にとっては遠かったが、落語「花見の仇討」や花見で有名な飛鳥山など、名所にはこと欠かない。

『剣客商売』では、秋山小兵衛の金の使い方の潔さ、水路の多かった江戸の町を縦横に駆け巡ることのできる船を操る若い妻など、現実とは隔離された世界が展開している。暇を持って余すごい金持ちでスッキリと金を使い、子息の秋山大治郎の妻となる前の佐々木三冬を惚れさせる秋山小兵衛には男であれば誰もがなつてみたいという欲望に駆られる。

秋山小兵衛の隠宅である鐘ヶ淵は江戸でも外れの外れでそんな場所に住むこと自体一種の仙境のような気がする。作者も久米の仙人を念頭において主人公を設定したのかも知れない。池波正太郎に興味をもつと、次には江戸切絵図、杉浦日向子氏、石川英輔氏、江戸検定などと興味の幅が広がってくる。

数年前神田神保町に住むこととなった。鬼平の役宅である清水門外も徒歩圏内である。こうなると、暇を見つけては散歩・散歩・散歩と散歩漬けの日々となり、江戸にドブプリと浸っている今日このごろである。

子母澤寛・生きている江戸人を感じる

若松謙二

司馬遼太郎が子母澤寛との対談で次のような感想を述べている。「新撰組について調査すると、どうしても先生の『新撰組始末記』を超えることができない」（中央公論・昭和42年（1967）8月）。司馬遼太郎を驚嘆させた子母澤寛の聞き取り調査の精度の高さは、現代の作家ではどうしても凌駕することができない未踏の分野である。

私は戦後すぐ旧制の中学生になったときから、作品をむさぼり読んだ。

学習よりも何倍も夢中になった。手元に『新撰組始末記』昭和42年11月中央公論の初版本と、『小説のタネ』の初版本の2冊がある。これは私にとって宝である。他の著書も多くあったが、家屋の改築や、貸した書籍の紛失などで、ほとんど散逸した。

子母澤寛に傾倒した理由は、どの作品でも江戸後期の人物が、まるで目の前にいるような臨場感があることである。その迫力の要因は、著者がその時代を生きた人たちや、消息を知悉している人びとからの、綿密な聞き取りをした資料の確かさにある。

ある書評に「書物などの資料だけを読んで、それをもとに創作しただけでは、このような現実感は生まれない」とあるが、これは名言である。「歴史は行動学である」という言葉があるが、子母澤作品もまた、聞き取り調査行動学のエキスである。私の父は、微禄な幕臣の孫として東京・下谷に生まれた。生前、子母澤作品をよく読んでいたが、父親から聞いていた江戸の空気が、正確に書けていると感心していた。

作品に登場する人物は、旗本・御家人といった幕臣と、遊侠博徒、江戸町火消しなど個性的な世渡りをする者たちが主人公になっている。その人物描写からは、彼らに対してある側隠の情を感じる。著者は幕臣の家系であり、また幼少の時、渡世の関係の人が身近にいたようである。その生い立ちが作風を確立させたのではないだろうか。

今でも作品を読みながら、江戸人と一体となれる作品の数々に、尽きない魅力を感じている。

懐かしい時代へ

山守美知子

久しぶりに杉本章子氏の作品『お狂言師歌吉うきよ曆』を読んだ。はじめの数行に、江戸の裏道に漂う生活の香りが匂い出てくる描写に、はっとす

るものを感じた。男性作家にはない細やかな描写は、女性のたおやかな優しさを読み手に伝えてきた。私は、どちらかという女性作家が好きだ。宮部みゆき氏、宇江佐真理氏、平岩弓枝氏、北原亜以子氏、藤原緋沙子氏、梅本育子氏、諸田玲子氏、松井今朝子氏。殺陣が絡む武士のものよりは、江戸の人情や人の機微、市井の人を描いた作品を好んで読んでいる。

時代小説といっても、現代の事件を江戸に置き換えて描かれている作品がほとんどであるが、それはそれで面白い。佐伯泰英氏描くところの『居眠り磐根』シリーズも面白いが、シリーズ物は長過ぎると物語が雑になるので切り上げ時が難しいかもしれない。

このシリーズをいまの倍まで書くとして作者は言っているが、読者としても情性では読みたくないの、倍はちよ

つとも言えるかもしれない。最近、風野真知雄氏の『耳袋秘帖』シリーズと『大江戸定年組』シリーズも楽しみに読んでいる。『耳袋秘帖』は南町奉行根岸鎮衛を主人公に彼が記した耳袋を素材に物語を作り、展開させてゆく妙味がある。『大江戸定年組』は、現代の定年を迎えた世代と重なり、同世代の私には「ふふふ」と笑いを誘う箇所や、「うんうん」とうなずくところが出てきたりして、荒削りなストーリーや少々の江戸風俗の間違いを消してくれ面白みがある。

時代小説は、江戸の香りが残っていた戦前を知っている作家に、現代の書き手が大きく負けているのは仕方がない。岡本綺堂氏の『半七捕物帳』には江戸そのものが描かれている。そんな小説を読むときは、大きく深呼吸をして江戸を身体中で感じることにして

いる。

私が幼かった昭和30年代の東京下町には江戸の名残があった。外に置かれた共同のゴミ箱は長屋にあったゴミ溜めと変わりがないはずである。家の前の道を荷馬車が通り、馬糞を落としていったことも覚えている。4歳違いの兄の記憶と私のそれとは、大分ひらきがあり私には曖昧なものしか残っていない。人は幸せだった頃に帰りたいと願うというが、守られて安心していられた幼い頃の懐かしい空気を時代小説に読み取っているのかもしれない。

特集「江戸小説とその作家」へのご応募ありがとうございました。同特集は引き続き皆様のご投稿をお待ちしております。

残したい震災復興小公園

大松友紀

今夏の猛暑。都心はヒートアイランド現象が発生しました。高層ビルの建設ラッシュで「環境にやさしい」とは言えないまちづくりへの警告なのかもしれません。

さて、江戸博では7月24日から9月9日まで、「生誕150周年記念・後藤新平展」が開催されていました。展示されていた建物模型の中で、文京区に住んでいる私にとって興味深かったのは「元町公園と旧元町小学校」でした。東京市（当時）が建設した復興小学校117校のうち52校に、校舎と隣接して小公園が設けられましたが、現在ただひとつ残っているのがこの模型の小学校と公園です。

本郷台地から神田川への崖線の地形を活かした設計で、緑の空間の中、カスケード（水階段）やパーゴラ（藤棚）、テラス状の広場など、昭和初期モダニズムの造形美にあふれた西洋式公園。

その前で「こんな所で母校に会えるなんて……」と思い出話をする女性や、「40年前にこのブランコで遊んだものだ」という男性など、テレビや新聞などで報道された存廃問題の行く末を案じるかのように、懐かしそうに模型を見つめる人たちに会いました。

小学校と隣接してつくられたこの公園は、後藤新平をはじめとする先進的な人々が知恵を絞って、防災と罹災者救護を目的とし、平時には近所の子供たちが遊び・学ぶ場所として、公園を小学校に一体化させるというアイデアを実現させたものだったのです。

『江戸名所図会』でも描かれたここからの展望は、当時は富士山や秩父の山々も一望できたといわれます。また、南の神田川の溪谷（仙台濠）は、中国の景勝にちなんで「小赤壁」とも呼ばれ、「うるおい、やすらぎ、風格」のあるすばらしい景観です。そうしたこともあって、この元町公園は昨年、国土交通省や日本公園緑地協会などが選定した「日本の歴史公園100選」に



文京区・元町公園

も選ばれています。

後藤新平や当時の担当者たちは、おそらく100年後の東京の姿を考えていろいろな事業を行ったのでしょうか、まさかヒートアイランドや地球温暖化なんてことは思いもしなかったでしょう。その「まさか!」の時代にふたたび彼らの発想が生き返って、東京都の「10年後の東京計画」の中では「水と緑のまちづくり」がうたわれるようになりました。震災遺産として貴重な小学校校舎と公園は、これからも地域の核として守られていかなければならないと強く思ったことでした。

【史跡めぐりの便利バス】



台東区民会館前の「めぐりん号」

両国からいえば川向こう、隅田川を浅草見附から浅草寺方面へと気ままな散歩にこれまでお付き合いいただきありがとうございます。このシリーズ最終回は、皆さんに台東区の史跡をめぐるかわいらしいバスの旅をご紹介しますと思います。浅草・雷門辺りを歩いているときに、レトロなミニバスを見かけた方は多いでしょう。乗ってみたくなるかわいらしいバスですが、でもどこに行くバスなのか、特別な切符が必要な観光バスなのかと、ついつい乗り損なっています。乗っていませんか。

このバスは台東区が運行する「めぐりん号」といいます。台東区内を3系統で走る循環バスで、しかも運賃は格安！名所・旧跡の多い台東区を移動するのに利用しない手はありません。

区民の足を目指してスタート

台東区は、東京23区の中でもっとも面積の小さな区です。その中にさまざまな産業や、観光地が凝縮されていて、賑やかといえば賑やか、複雑といえば複雑なところ。区民の足も鉄道路線はJR、東京メトロ、都営地下鉄、東武鉄道、京成電鉄につくばエクスプレス、そして水上バスまであるのですが、意外なことに下町に住む人にとってはあまり身近な乗り物ではないそうです。台東区都市づくり部道路交通課の大塩憲一氏は、「台東区は高齢者が多いうえ、上野から谷中にかけてなど坂道の多いところ。大型の路線バスが走れないところも多く、きめ

細かく住民の足を確保することで、病院や役所などにも行きやすいバスを走らせたい」との発想から始まったそうです。観光よりも福祉優先でスタートした「めぐりん号」ですが、平成13年に最初の運行をはじめた「北めぐりん」はレトロなスタイルで登場し、観光の役目も十分に考慮されたものでした。平成16年から「南めぐりん」が、平成18年から「東西めぐりん」が運行されました。

自分なりのガイドブック活用術で

さて、バスに乗ってみましょう。3系統とも循環バスですから必ずもの停留所に戻ってきます。少々の乗り物音痴でも大丈夫。

「北めぐりん」は地下鉄浅草駅から今戸、三ノ輪、一葉記念館、入谷、千束など35停留所を45分で走り浅草に戻ります。

「南めぐりん」は上野駅を起点に御徒町、浅草橋、鳥越神社、かつば橋など26停留所を45分で回ります。

「東西めぐりん」は台東区役所を起点に国立博物館など上野公園を抜けて谷中、千駄木、不忍池、ここでコースが交差して松が谷、雷門など32停留所をめぐって上野へ。所要時間ももっとも長く75分。いずれのバスも15分間隔で運行されていますが、やや問題なのは片側方向の循環バスのために、反対方向の割合近いところへ行く場合です。しばらくは下町観光を楽しんで

いただくこととなります。もっとも乗車してみれば分かるのですが、とくに急いでいる風な人は見かけませんでした。

各コースのバスを乗り継ぐこともできます。乗車料金100円(現金のみでカードは使えません)で、乗り換え1回に限り100円のまま。乗り換え拠点も数箇所作ってあります。一日乗車券は300円。行ってみたい寺社などを予めチェックしておき、バスを降りて見学後に停留所に戻れば、最大待つ15分後には「めぐりん号」で次の目的地に出発できます。

では、見どころは何処かとなるとこれは皆さん個々の興味・関心の世界ですから、なんともいいようがありません。また、車中では観光案内はほとんどありません。なぜなら停留所の間隔が短いため、案内をする時間がないのだそうで、例外的に上野公園内で短い観光案内を聞くことができます。

したがって、観光案内はガイドブックに頼って、自分なりのコースを楽しむこととなりますが、これも案外良いものです。

個人的な話ですが、『あの人の眠る場所』(実業之日本社)を持ってバスに乗りました。東京のお墓めぐりの本ですが、浅草・谷中の案内はとくに多く、この場合は「東西めぐりん」が最適と判断して出発。実のところバスは各停留所で降りてみたいと思うほどにきめ細かく下町の路地を走り抜けてくれ、ガイドブックから外れっぱなしのお墓巡りになりました。

こうした自治体が運営する地域の“足”は少しずつ増えているようです。文京区では「B-ぐる」号を走らせていて、同じように楽しめるようです。いろいろな地域の足を活用して、皆さんもたくさんめぐってみてください。



▲「めぐりん号」3系統の路線図

【取材】文・写真:広報部会・大石憲一 イラスト:同・松原良
資料提供:台東区都市づくり部

催事案内

友の会セミナー

第61回「幕末の風刺画—人々の絵解き記録を読む—」 講師 湯浅淑子さん

◆天保14年(1843)、浮世絵師歌川国芳が「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」を描きました。この絵は、病に伏せる源頼光が土蜘蛛の妖怪に悩まされる場面を描いたものですが、天保改革を風刺したものとして、当時、大評判となりました。人々はこの絵を買い求め、病床の頼光は十二代将軍家慶、頼光の家臣ト部季武は水野忠邦、そして土蜘蛛が作り出す妖怪は改革で弾圧された人々などと、思い思いに絵解きを行いました。この「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」の出版後、多くの絵が風刺画と考えられ、絵解きが行われていきますが、今回は、人々がどのような絵をどう解いたのか、当時の日記や随筆の記述から見るとともに、絵が先に出版され、後の事件を当てはめているいくつかの例を通して、絵師の意図と人々の絵解きのズレがあったことも紹介していただきます。

○講師略歴：ゆあさ・よしこ

東京学芸大学教育学部卒業(江戸博物館長竹内誠ゼミ出身)。現在たばこと塩の博物館学芸員。共著：『こんなに楽しい江戸の浮世絵—江戸の人はどう使ったか—』(平成11年 東京美術)

- 開催日：11月24日(土) 14:00～15:30
- 申込締切：11月13日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階学習室1,2
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第62回「江戸の富くじ ～^{かく}攫千金の仕掛け人～」 講師 滝口正哉さん

◆江戸で行われた富くじは当時、富突や富と呼ばれ、幕府が特定の寺社を助成するために許可制をとって実施されていました。特に文化～天保期には数多くの興行があり、最盛期を迎えました。当時の興行にまつわる史料を読み解いていくと、興行システムや運営の多重構造が浮かび上がり、時代劇などでわれわれがイメージしているのは違った実態がみえてくるといいます。富くじを通して文化～天保期の江戸社会を語っていただきます。

○講師略歴：たきぐち・まさや

早稲田大学教育学部卒業。立正大学大学院文学研究科博士課程満期退学。文学博士。千代田区立四番町歴史民俗資料館文化財調査指導員。専門は近世都市史・文化史。かつて江戸博で竹内誠館長の講座を受け、江戸に目覚める。主に江戸庶民と寺社との関わりを中心に研究している。

- 開催日：12月22日(土) 14:00～15:30
- 申込締切：12月11日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

第63回「江戸300藩殿様のその後」 —明治から平成まで、大名はこう生き抜いた—

講師 山中良昭さん

◆江戸260年余の間、藩を守ってきた約300藩の大名たちは明治維新後どうなったか、元大名たちが明治、大正、昭和、平成の各時代をどのように生きたかについて、豊富な資料をもとに多くのエピソードなどをお話ししていただきます。

○講師略歴：やまなか・よしあき

昭和28年(1953)福岡県生まれ。同志社大学文化史学科卒。歴史書編集者、歴史紀行作家として「城郭と城下町」「人間昭和史」などを編纂。著書は『日本百名城』『日本百合戦』『もう一度学びたい日本の城』など多数。

- 開催日：1月15日(火) 14:00～15:30
- 申込締切：12月25日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階会議室
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】藤村武雄(事業部会)

友の会特別観覧会

「北斎—ヨーロッパを魅了した江戸の絵師—」展

◆日本人の多くが一度は耳にしたことのある浮世絵師の葛飾北斎ですが、長崎の出島に滞在していたオランダ商館長たちが江戸参府のとき北斎に肉筆の風俗画を描かせ、祖国に持ち帰っていたことが知られています。ライデンのオランダ国立民俗学博物館とパリのフランス国立図書館に分蔵されていた、これらの作品が今回初めて同時に里帰りします。そして「富嶽三十六景」など北斎芸術として親しまれてきた作品の幅広い紹介と相まって、ヨーロッパをも魅了した江戸の絵師・北斎の芸術を改めて味わうことのできる特別展です。担当の我妻直美学芸員による「見どころ解説」をお願いしてありますので、ご期待ください。

- 開催日：12月6日(木) 17:00～19:00
- 申込締切：11月27日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階学習室1・2 / 企画展示室
※解説の会場は変わる場合があります。
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

【お断り】 定員オーバーの場合抽選のケースが増えます！
従来各催事とも定員オーバーでも極力申込者全員が参加できるような運営に努めてきましたが、会員増・申込者増によりそれも限界になりつつあります。今後対策を検討していきますが、当面は抽選によるしかありません。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

古文書講座

第2期の残日程

古文書講座の今年度第2期の残日程は次のとおりです。

- ◆入門編[講師:小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)]
11/14(水) 14:00~16:00、江戸博1階会議室
- ◆初級編[講師:長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)]
11/7(水) 14:00~16:00、江戸博1階学習室1、2
- ◆中級編[講師:小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)]
11/17日(土) 14:00~16:00、江戸博1階会議室

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

第3期は1月から開講しますが、新規申込の受付はいたしませんのでご了承ください。なお、来年度については多数の受講希望者が予想されるため対策を検討中です。

見学会

「深川の史跡—その1」

- ◆広い江東区のうち、深川を開いた深川八郎右衛門の祠(ほこら)だった深川神明宮から芭蕉ゆかりのところを歩き、江戸の発展に大いに寄与した小名木川に架かる万年橋、高橋を渡り、さらに深川江戸資料館、霊巖寺へ。解散は15時半ごろ清澄白河駅近くの清澄公園脇となりますが、時間的また体力的に余裕のある方は資料館や清澄公園内の散策をどうぞ。
 - 開催日:11月18日(日) 12時45分集合。ただし、時間前でも集まり次第順次出発します。
 - 集合場所:都営地下鉄新宿線、大江戸線森下駅(出口A3地上)
 - 申込締切:11月8日(木)必着
 - 定員:80名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)、申し込み多数の場合は抽選
 - 参加費:会員、同伴者とも500円(当日払い)
- 【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

お申込方法

- ◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
- ◆締切:各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先: 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局

会員優待のお知らせ

好評開催中!

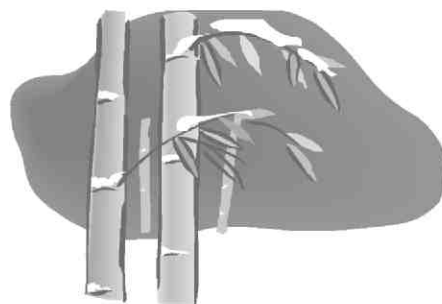
- 特別展 文豪・夏目漱石
—そのころとまなざし—
—東北大学創立100周年・漱石朝日新聞入社100年・江戸東京博物館開館15周年記念—
会期 2007年9月26日(水)~11月18日(日)
休館日:毎週月曜日
会員:一般550円、65歳以上270円、大・専門生440円
同伴者:一般880円、65歳以上440円、大・専門生700円

次回予告

- 特別展 北斎
—ヨーロッパを魅了した江戸の絵師—
会期 2007年12月4日(火)~2008年1月27日(日)
休館日:12月10日、17日、25日、28日~1月1日
※1月2日(水)3日(木)は午前11時から開館
会員:一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者:一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

企画展のご案内

- 企画展 川上小白と江戸千家展
—花ひらく茶の湯の妙道—
開催期間 2007年10月23日(火)~12月16日(日)
会場 5階常設展示室内 第2企画展示室
- 次回企画展 北斎漫画展
同時開催 北斎諸国名橋奇覧、諸国瀧廻り復刻版画展
開催期間 2008年1月2日(水)~2月11日(月・祝)
会場 5階常設展示室内 第2企画展示室



会報<えど友>第40号
平成19年11月1日発行(隔月奇数月1日発行)
編集・制作:江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人:大石憲一(副会長)
編集人:松原良、菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、林榮二、深尾恵美子、福島信一
発行:江戸東京博物館友の会
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910